

幼稚園3歳児1学期をどう捉えるか

それまでの成長の到達点から保育を展開する

栗原ひとみ
(二葉幼稚園)

少子化が進行し、各家庭においても地域においても、子育てが困難な状況にあると言われて久しい。幼稚園に入園してくる子どももまた、さまざまな面で経験や育ちの機会を得ることなく、入園してくる子が増えてきている。今まで入園までに育てているものとして考えられていたものが、前提として成り立たない傾向にある。例えば入園前までに養育者との安定的な関係が築かれていないため、3歳児なりの自己コントロール力が十分に育っていない。また以前は排泄のいちおの自立が入園の前提となっていたが今はオムツ着用のまま入園してくる子どもが増えている。筆者は幼稚園教諭として入園前の子どもの育ちの変化に危惧を抱いているものである。

1. 研究の目的

3歳児1学期は家庭が生育環境であった時期と家庭以外の生育環境である集団保育の場に参加していく時期との接続する部分としての意味を持つのである。この時期の子どもの変化や保育の状態を詳らかにし、3歳児1学期の保育の在り方を検討する。

2. 研究の方法

過去10年における保育記録から変化している事項を抽出していく。子どもの実態、保護者の関わり、保育者の意識の3点から変化と要因を考察する。

3. 結果

①3歳児なりの自己の育ちが遅く、自己をコントロールする力が弱くなっている。

関わりを求めているが、自分の思いを押し通すだけになってしまったり、ちょっとぶつかっただけなのに「ぶつたな」と殴りかかる等のもめごとが頻発する。

これは、それまでの親子関係で、子どもが主体的に、共感を持って受容されてこなかったことが要因として考えられる。親は、子育てに対する不安と同様に自分自身に対する不安を抱えており、子どもの自己に向き合う精神的な余裕がない。子どもの思いを共感を持って支えたり、映し出す援助が受けられず、子どもは自己の輪郭をつかめないでいる。

②10年前に比べて、3歳時保育の1学期において、「子ども同士の関わり」に対する興味が、「おもちゃ遊び」に対する興味よりも前面に出てきている。

この要因として、入園前に子ども同士が関わる機会が少なくなっていることがあげられる。そのことは親にとっても関わりを学ぶ機会の減少を意味する。玩具のとりあいっこ等でもめると親が介入し解決して、確執やストレスを抱え込まないように、事前に我が子を叱りぶつかり合いを未然に防いでしまう。子ども同士の関わりに対する興味が、「同年代の子どもと群れたい」という本能が、それまで満たされなかった分、幼稚園に来て表出しているのではないかと

③「おむつがはずれるのが遅くなってきている」

このことは生活習慣の自立に大きく関わっている。要因は紙おむつの普及と親の遅寝遅起き等による生活リズムの乱れである。紙おむつは親の都合を優先することができ、生活リズムを大人優先につくることができる。親は失敗をも引き受けて、何度でも洗い、その過程を通して子どものいまの状態を適切に見極めて導いていくという、親としての学びの体験が不十分となるのではないかと筆者は考えている。

④「全部残さず食べることが少なくなっている」

要因はバイキング方式の普及や加工食品、冷凍食品の普及と親の意識の変化である。体づくりを進める幼児期からバイキング方式で好きな食品だけ食べる生活は健康面での影響が危惧されるのである。

また幼稚園児のお弁当における冷凍食品の普及には目を見張るものがある。親が自分で調理したのではないだけに、残さずきれいに食べてもらえなくてもよしとする意識が働いているのではないだろうか。ここでも親のペースでのお弁当作りがされており、経済性や効率の価値が選択されているのである。

<結論>

子どもは家庭において大人の都合による大人優先の生活のペースで育つ傾向がここ10年間で強まってきている。従って、幼稚園の現場では次のような点に比重を置いた保育を展開するべきであると考えられる。

1. 自己の獲得を援助する

人として生きることは自分の人生を生きる事であり、そのためには他でもない「自己」を獲得していかななくてはならない。身体を中心には欲求（気持ち）があり、それを所有しているのは私であるという、感覚をもっていく。それが「自己の獲得」である。時期は概ね3歳前後であると言われている。

入園前子どもは大人の都合による大人優先の生活のペースで育ってきた。子どもが初めて主体的に生活できる、その場所を保障するのが幼稚園である。

保育者は子どもが母親の従属的立場、もしくは監視下の関係にあった状態を転換させ、子どもが主体の生活をつくる必要がある。保育者との関係を軸に保護者との関係、子ども同士の関係、友達親子の関係等で、その子どもの世界の広がりを支えていく。

この10年の変化を受けて、保育の中で強調していくべき課題は、子どもの主体性を支える援助であり、そのことを援助の基本命題に据えることである。具体的には子どもの気持ちや思いを丁寧にすくい出して共感を重ねていく保育である。子どもの思いを共感とともに映しだしていく大人の援助を受け、子どもは映し出された自己と向き合う事ができ、自己を獲得していく成長に向うことができる。

自己主張の体験、共感してもらえ体験、気持ちをわかってもらえ体験、子どもが主体的であろうとする体験が足りないという認識に立って、保育ではその部分の育ちを特に援助する必要がある。

2. 友達と関わる機会を意図的に組み込んでいく

特に3歳児1学期は「友だちの存在に気がついていく」ことが大事である。それまで家庭において子ども同士のふれあいが少ない3歳児ばかりが集まってくるのだから、だれも譲ったり、折り合ったりはまだできない。できないが、共に遊ぶ中で、思いがぶつかったり、みんな一緒に楽しいを体験したり、多様な情緒的体験をすることで、人とかかわりを学んでいくのである。

具体的に子どもはどうやって幼稚園で友だちの存在に気がついていくのか。それは「その場の感情を共有していく」体験の積み重ねでもある。楽しそうに遊んでいる相手の内側の思いに参加していく。相手の内側に参加する事で、その楽しさを自分のものとしていき、周囲から分化していく。楽しい遊びが終わっても内側の楽しさを共有した者同士の関係が解消されずに残っていて、また次の機会にも楽しさを共有し合いたいと欲することが、友達を見出して

いく事であり、友達の存在に気がついていくことになるのである。保育者が友達との出会いを意図的に組み込んでいくということは、こういった子ども同士の内側に参加した思い、共有した楽しさを理解し、それを子どもにわかりやすい形で投げ返していくことではないか。保育者がそういった関係ややりとりを意識的に励まし認めていくことが、友達と関わる機会を意図的に組み込んでいくことになる。

3. 排泄面での課題はその子どもの全体の様子を把握してから、取り組む。

まず、その子どもの全体的な成長の様子を把握し、さらに排泄面における成長の段階をよく見極めていく必要がある。家庭で排泄面での成長が長く保留となっていた状態（日中もオムツ着用）はなぜなのか話しを聞き、園での子どもの様子と重ね合わせていく過程をたどる必要がある。その過程こそが入園前と入園後の接続点となるのではないだろうか。その過程で親子と保育者が信頼関係を深めていくことが重要である。

排泄面において成長が長く保留にされていた状況は、そのことだけに問題が留まるものではない。子どもの今ある姿から親が的確に子供の状態を見極められないということもあるので子どもへの援助とともに親への援助が不可欠である。子どもを中心に据えて親と保育者が協働する関係づくりが、求められているのである。

4. 食事の大切さと向き合う

子どもに対しては、食事はきちんと残さずに食べることがたくさん遊べる丈夫な身体を造るという理解を導いていく。親には、食の大切さ、栄養の役割や命の健康保持等にしっかりと向き合う姿勢や態度、そして親子で楽しく食べる習慣を育成する援助が、重要である。

筆者は幼稚園教育はもっと0、1、2歳児の育ちに真剣に注目していかなくてはいけないと考えている。特に2歳児までの育ちと幼稚園3歳児1学期の保育が滑らかに接続し、それまでの子どもの育ちの不足を補ったり、促したり、循環し連動していくかたちで保育が営まれることが重要である。

2歳児までの成長の到達点から1人ひとりの保育の目標を設定し、子どもの主体性を支える援助、共感を重ねていく援助が求められていると考えている。

資料. 二葉幼稚園週案記録H4年～13年の10年分